

『能：リア王』の魅力 —薬草による浄化—
**The Magnetism of Noh: King Lear
– The Purification by “Unpublished Virtues”**

遠藤 花子

ENDO Hanako

Abstract: I was very pleased to see the fourth performance of Kuniyoshi Ueda’s *Noh: King Lear*, and was especially interested in its opening scene, which, I thought, was the most essential in the performance. *Noh: King Lear* begins with the scene of Cordelia talking to “unpublished virtues” and “the earth” in act four in original *King Lear*. The way Cordelia mentions “unpublished virtues” and “the earth” looks as if she is already dead, coming down from the heaven in order to tell something to people on the earth like some of other noh performances. Act four in *King Lear* is, in fact, the scene witnessing the truth and human beauty, because all bloody and tragic scenes such as the banishment of Cordelia, Lear being deceived by his own daughters, Gloucester being hollowed his eyes out, and Goneril and Regan fighting for Edmund. In *Noh: King Lear*, because of the omission of villainous characters, it seems that the world where “unpublished virtues” grow with Cordelia’s tears is already purified. It could be said that “unpublished virtues” would absorb all taints on the earth, making the world filled with love and truth. Although the tragedy of *King Lear* is based on betrayal and the death of good people, *Noh: King Lear* is the beautiful adaptation implying salvation and enlightenment. *Noh: King Lear* is definitely the masterpiece with the combination of traditional Japanese culture and British legacy.

Key Words: *Noh: King Lear*, *King Lear*, Kuniyoshi UEDA, Cordelia, unpublished virtues, adaptation

『能：リア王』、『リア王』、上田邦義、コーディーリア、薬草、アダプテーション

今回の上田（宗方）邦義先生の『能：リア王』は、再々々演ということで4度目の舞台であり、念願叶って初めて観ることができて、非常に嬉しく思っている。この舞台の中で特に興味を持ったのは、最初に述べられている薬草による憎悪の浄化と、透き通るような結末である。

この舞台の始まりのコーディーリアの大地と薬草に訴えかけるセリフには、『能：リア王』の精髓を見出すことができる。最初の台詞は、コーディーリアによる「げに恵み深き大地に潜み。

いまだ知られぬすべての薬草よ。わが涙を受けて芽を出だし。悩める善き人を癒し給へ。」である。英語では下記のようにになっている。

All blessed secrets,
All you unpublished virtues of the earth,
Spring with my tears!

コーディーリアが、この世の平安と父の安否を祈るように、大地に潜む植物に訴えかけているのが伝わってくるシーンである。薬草は自然の恵みであり、大地からの贈り物であるが、死者は大地に帰ることから、この台詞の中に既に「死」が暗示されているかのようなのである。そしてまた、コーディーリアは、何かを伝えにあの世から降りてきた人間であるかのようにも感じ取れる。

実際に『能：リア王』の最初の場面は、シェイクスピアの『リア王』の場面で言うと、4幕での、コーディーリアと忠実な家臣のケントが行方不明になったリアを探しに行くところ、つまり、前半で起こる血生臭さが終わり、悲劇の結末に向けてスタートしたところから始まっている。『能：リア王』は、コーディーリアとリア王、及び侍女と隊長と物語の全貌を語る道化が登場するのみであって、『リア王』にみられるような醜い相続権争いや、自分の娘たちから酷い仕打ちを受けるリアの姿や、グロスターが目をえぐられるシーン、姉妹によるエドモンドをめぐる争いなど、人間の憎悪がむき出しになっている場面はすべてカットされている。

必死でリアを探すコーディーリアの姿は、嵐の中で狂気に陥っているリアを想う者にとって安心感をもたらす場面である。しかしそれ以前に、この世の“unpublished virtues”が芽を出すようにコーディーリアが願っている世界は、既に浄化された世界であり、親子愛と人間的な徳にあふれたカタルシスの世界であることが分かる。このことは見ている側にとって、非常にすっきりとした気持ちにさせられるのである。それは、薬草の中に憎悪のすべてが閉じ込められ、薬草によりこの世の毒がすでに解毒され、世の中が治療済みの状態から舞台が始まっている為だと言える。

『リア王』の後半の場面に焦点を当てると、これほど澄み切ったストーリーになるのかと、改めて思い知らされた。最初にコーディーリアが語っているように、涙で育った薬草に浄化された世界は本当に素晴らしい。いわば、死への旅路はこの最初の場面から始まり、毒々しい地上の人間世界に別れを告げるのである。地上界を描いたものが『リア王』であり、『能：リア王』は人間の善悪を知り尽くした悟りの世界なのである。

シェイクスピアの悲劇は、地上における人間の摩擦と人間が極悪になるところにあり、善い人が殺され、息絶えるところにある。『リア王』の悲劇たる所以は、二人の娘に裏切られ、たらい回しにされた挙句、居所を失う惨めな老人の死と心優しいコーディーリアの死にある。一方、『能：リア王』では、コーディーリアがリアを探し、一緒にあの世へ旅立つ親子の愛情と浄化

された世界が描かれている。『リア王』は悲痛と共に幕を閉じるが、『能: リア王』はむしろ、晴れ晴れとした気持ちにさせられる。それは、『能: リア王』においては、コーディーリアを抱えて泣き叫ぶリアの姿に悲観的にさせられることはなく、親子と一緒に天国へ美しく導かれていく様子に心が洗われることにある。また、リアとコーディーリアによるこの世とあの世とを結ぶ舞いと、天国へ昇っていく二人の姿には心を打たせる力がある。

『能: リア王』は、死者となったコーディーリアを見事に美しく復活させたと言える。能には、人間の不幸が描かれることはあっても、救いや悟りがある。悲劇『リア王』がそれらをテーマにした作品に改作されたことで、非常に美しいものになっている。1680/81年、ネイハム・テイト (Nahum Tate) は『リア王一代記』(*The History of King Lear*) と称して『リア王』をハッピー・エンドに書き換えたが、これは、この時代においては悲劇よりも喜劇が好まれた結果である。21世紀の日本において、『リア王』は『能: リア王』として日本の伝統芸能を取り入れた作品に脚色された。作品の内容を大きく変えることはなく、悲劇のままリアの救いを描いた作品である。能だからこそ描くことができた美しい『リア王』は、西洋にない文化をとりいれつつ、能の大事な要素を取り入れた、見事な『リア王』のアダプテーションである。

シェイクスピアはその国独自のものを含んで上演／上映されることが非常に多くあるが、日本古来の伝統文化をここに重ね合わせることで、日本特有のシェイクスピア劇のアダプテーションが生まれる。シェイクスピアはイギリスの代表的な作家であり、イギリス文学において重要な地位を占めているが、能も日本文学において決して無視することはできない。『能: リア王』はそんな二つの重要な要素が融合した最高傑作と言える。